
もう一人

萌百合雛乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人

【NZコード】

N3136H

【作者名】

萌百合雛乃

【あらすじ】

自分を見失った夏樹が悪夢でのもう一人の自分と決闘。その先の未来は・・・

(前書き)

えーと、少々病んでいる作品なので
まあ軽く読んでくれるくらいで結構です^ ^
文章とかぐだぐだですし、誤字脱字あるかもしませんが
ご了承ください。

何してるんだ？

俺がその子に聞いたてるとその子は笑つて言つた。

「お前と同じ事してこる。同時に全く別のことをしてこる」と。

訳がわからないまま考へてると暗くなつて消えた。

俺はそのままの顔を確かにみたはずなのに、思い出すことができなかつた。

・・・

「んん・・・」

朝だ。いつの間に寝てしまつたのだろう。

確か、朝の3時までは起きていた。また微妙な時間に寝てしまい、今時計を見た限り、午前10時をこえている。

「はーあ。」

だるい体を起こす。まあ、起きたからといつて何もしないのだけれど。

自分と同じ歳の奴等は、今は学校で気温の熱さに耐えつつも先生のながつたらしい授業を黙々と聞いているのだろう。

俺は汗でしめつたシャツを脱ぎ捨てた。

変にこつていて右肩を左手を握り締めて軽く叩く。

俺が学校に行くのをやめてから半年がたつた。

現在中学2年生である。今の時期は、そうだな、みんなが待ち侘びる夏休みの一歩手前だ。

俺はこの生活に慣れたのだろうか。

いや、きっと慣れていない。ただ、クラスのみんなが自分を忘れかけていることは分かつていた。

最初は、なぜ休むのだろうとこう疑問が降りかかり、心配と同情の目もあつたが

今となつては不登校の一人として放置されている。

まあ、そんなことで集られても困るが。

「夏ー？！ 夏樹ー？ いい加減起きなさいよーー！」

親が叫んでいる。

俺の家は母親と父親の三人家族。

そして俺はこの家に生まれたことを軽く後悔している。

まあ自分が所謂反抗期な時期かと言われば、間違つてはいけど。

「起きてるっての・・・」

俺は咳きながら上半身裸で1階に降りた。

「夏起きてたの？ おそかつたわねーまったくー

笑いながら口を尖らせてぶーぶーしている。

最初は学校へ行けとうるさかつた母親も

俺が本気で行かなくなると何も言わなくなつた。

そして心なしか痩せた母親にいらつきが隠せなかつた。

そんな風に無理して笑顔を作られるくらいなら

思いきり叫ばれ、ぶつけられたほうがマシだと。

「昨日はネットしてたんだよ馬鹿

「早く寝なさいっていったのに！？」

卷之二

それに馬鹿はいらぬのよー?」

一
はい
はい

「うなたこ。もう一これがずっとで、うなたこ。

「あ、夏、ご飯は？！」

部屋の扉を思い切りしめてクーラーをつける。

クーラーが効き始め、俺はPCの電源を入れた。

パスワードを入力してデスクトップを見つける。光を放つその画面を見て、ふと思つた。

アーティスト、今田耕司は、歌謡曲の歌詞を書くのが得意。

あれは誰なんだ・・・?

「どういう意味だよ。わけわからんねえな。」
俺は軽く笑いながらすいすいとマウスを動かし始めた。

- 無題掲示板 -

俺の居場所ともいえるこの掲示板にはいろんな奴がたくさんきた。
笑つてばかりの奴や、闇を持つた奴まで。

ここに集う意味が何があるのだろうか。

いや、たぶん誰もが人恋しいのだろう。

俺もそんなに明るいほうではないが、やっぱりここから抜け出すのは難しい状態にまでなつていた。

ネット中毒といつやつだろうか。

そんな事を考えていたら、ある投稿が目にひついた。

HN：名無しさんが通ります @閻主

本文：

並べられた言葉だけが本当の意味なのだろうか。
聞こえる声だけが本当に心の叫びなのだろうか。
見えるものだけが本当にある世界なのだろうか。
今こいつしている自分が本当の自分なのだろうか。

俺は、少し考えた。

難しかつたけど言つてる意味が分かつた気がした。

今俺はきっと自分の口から本当に思つてている言葉の一つかえ

吐き出せていらない気がした。

吐き出せば変わるかもしぬれない何かを

吐き出してもしょうがないという気持ちで押し潰していく。

ただ、それじゃあ今吐き出せ、なんていわれても
無理に等しい。つまり何かと心の疊りが取れない。

それは簡単なことではなかつた。

だからこそ、この人と同じよつてそれぞれの意見を生み出し、考え、
悩み、苦しむのだろう。

そうだ。俺は何かに悩んでいる。そして今の自分に不満を持ち、
今しなければいけない何かから逃げていて自分を変えたいと思つて
いた。

ただ、俺はもうすでに手をつけられない状態だった。
もしかすると、気がついてないのは俺だけだったのを

もしかすると、気がついてないのは俺だけだったのかもしれない。

最近何やら母親がよく父親に俺の名前をだす話題をこじこじと話していた。同じに心の病気といつ言葉が聞こえてきた」と思いました。

俺は心の病気なのか？だとしたらそれはどうしてものなんだ？自分でも気づかない病状とやらに不安を隠せなくなつた。

「 いともたつてもいられなくなり、普段の冷静すぎる自分を見失う。
どうしようどうしようどうしよう・・・
耐えられなくなつた俺は布団にもぐりこんだ。
クーラーが若干効きすぎて寒くなつてきたこの部屋で
何よりも冷たくなつたのは俺の心だつた。
必死に目を瞑り、丸くなりながらまた眠りについた。 」

• • •

「ハハハ・・・やつと気がついたんだね」

「お前・・誰?」

俺は〔〕覚めると夢でおかしな事を言ひ奴と無會していた。

詰たゞてハハ 僕の顔をよく見などいひよ

卷之三

「ひい・・・・！・！・！」

俺だつた。

「アーティストのためのアートセミナー」

「俺なのか？俺がもう一人？どうなつてゐる、

「俺は俺自身、つまりお前だよ」

「説明になつてないだろ。気持ち悪い、ここからだしてくれ」

「入ってきたのはお前さ。お前は今まで俺から逃げてきたんだよ」

「逃げる？俺がお前と会うのは今で2回目だな……」

「そう。それはお前が逃げてきたからだ。聞きたくない自分の声から逃げてきた、そつだろ？」

「聞きたくない自分の声？」

「お前が自覚などしたくなかった自分の変化だ」

「変化・・心の病気か・・・？」

「それに気づいて、お前は分からなくなつた自分の本当の気持ちを探しにきたんだろ？」

「しらねえよ、そんなの・・・」

「また逃げる気か？まあ、それを決めるのもお前だ」

「でもどうやって・・・」

「それはお前が知つてるはずだよ」

「俺が？」

「俺はお前と同じ」としている。同時に別の事をしている。」

「だからなんだよ、それ」

「まだ分からないのか？ハハ。お前も俺だし俺もお前だといつている。俺とお前は同じ俺だけど、やつていることや思つてていることまでは同じではない。そして俺がお前になることも、あるんだよ。ハハハハ」

「あ、ちよ、ちよっとまって……おこ……おい……！」

「おいッ！…………！」

「・・・あ、れ夢か・・はーあーあーあ

時計を見る。午後3時。

寝たのは確か午前11時前。

どれだけ寝てるんだ、と自分でも突つ込みたいくらい寝た。

おかげで変な夢もみた。

気がおかしくなつてしまつたのか。

ただ、あいつの言葉は何か引っかかる。どういう意味なのだろうか。

・・・考えすぎた。外にでよう。

「ちょっとでかける」

「あれ、夏どこいくのーー?」

「散歩だよ散歩」

「早く帰ってきてよーー??!」

俺は返事もせずに外へでた。

別にひきこもりなわけじゃないから外へでることはある。
ただ基本一人だ。別に寂しくなんかない。

むしろ人と話すのは疲れるから苦手だ。

俺はあわてて着てきたシャツを伸ばしながら歩き始めた。
住んでいるところはそこまで田舎ではないが、都会でもない。
人がちらほらいるくらいだ。

暑い日差しが降り注ぐ道路で俺は出てきた事を少し後悔した。

「あつちい・・・」

手で額の汗を拭いながら俺は人を観察していた。

少し目をこすつて変化に気づいた。

こんなに暗かつただろうか。

太陽がでていて、昼だというのにこんなに暗いなんておかしい。
それに誰も俺をみていない。すれ違う人で目が合つやつが一人くら
いいても

おかしくないのに・・・俺はみえてないのか?・・・なんなんだ。
おかしい。変だ。おかしいぞ。

急いで家に帰る。

勢いよく扉を開けて靴を脱ぎ捨てる。

「おい、母さん！！」

「ふんふーん ふふーん」

鼻歌でリズムを取り晩御飯を作っている。

「なあ、きいてんのかよ！」

「」

「おい・・・・・もひ、いい」

俺は2階の部屋で電気もつけずに考えた。

どうなってる・・・??

みえてないのか・・いや、でもでかける前は確かに母親と話していた。

その短い間に何かあったとは考えられない。
どうじこりとなんだ。

考えたくもない事実から目をそむけるためネットをつけた。
掲示板へ行き、書き込みをした。

HN：名無しさんが通ります@夏

本文：

暇だー

誰か相手しろー

熱すぎて頭おかしくなるわw

同意な人、挙手れ。

- 書き込み -

書き込みボタンを押して反映を待つと、

ERROR!!

更新するか、時間を置いてから書き込んでください。

投稿できない・・・

それから何度もしたけどできなかつた。
おかしい、おかしい、おかしすぎる。

その日は晩御飯も呼ばれなかつた。

俺が狂つてるのか？それとも周りが？
あいつしか・・もうあいつしかいない。

俺は布団にもぐつこみ眠りについた。

・・・

「やあ。調子はどう？ハハ」

「お前、何か知ってるだろ」

「んー、何をだらう。ハハハ」

「とほけるな。何をした」

「そうだ。俺の今日の一日を見せてあげるよ

「は？俺はそんなこときいてるわけじゃ・・・」

その瞬間、もう一人の俺は俺を抱きしめた。

「馬鹿！やめろッ・・何すんだよ離せッ・・・

「少しほれようがいいなあ・・・」

そういうもののすゞい目で俺を睨んだ

一瞬びびつたけど、すぐまた笑顔になつたその顔を見て、

ほつとしたと思つたら俺の意識はぶつ飛んだ。

遠くで声が聞こえる。

「これが俺の今日の一日だよ。ハハ」

そういうて聞こえると俺の視界が明るくなつた。

「いつてきまーす！！」

「あーっ夏！！御弁当ー！」

「あ、わりいわりい」

「早くいってらっしゃい！」

「おうつ

そういうて走つていく俺がいた。

片手にサッカー ボールを持ちながら。

そうか、サッカー部だつたな、俺。

使い古しのサッカー ボールをかけたブレザーの肩は白くなつていた。

学校についた俺はクラスの男子と挨拶を交わしていた。

するとたまに話しをする女子が、「土ついてるよっ」と笑顔で

俺の肩をぽんぽんつと叩いた。

俺はとつさに「あ、わりい」といい、席につく。

眠気の襲う授業をだるそうに受けている俺がいる。

そして放課後、仲間達とサッカーをしている俺がいる。

帰り道、鞄を肩にかけ、ネットに入つたサッカー ボールを蹴りながら歩く俺がいる。

家に帰つて荷物を放置しつつ、晩御飯をつまみ食いする俺がいる。

俺の手を叩き、俺の荷物を片付ける笑顔の母さんがいる。

そして父さんと3人で食卓をかこんでいる。

そんな普通の、今思えば幸せといえる日常を送つてる俺がいた。

・・・

「これって・・」

「俺の今日一日だよ」

「お前はずっと闇の中でいるんじゃないのか・・?・?」

「そんなことはない。言つたら?俺がお前になることもある、と。」

「そ、そんなのしんじねえ。夢でしか会えないようなお前に・・や
んなことができるか」

「どうかな。ハハハ」

俺は焦りと嫉妬を抑えてるので精一杯だった。

俺が、消えていく。やつと意味が分かつた気がした。

こいつの言つている意味。俺。

全てが変わっている。それも”俺”の意志とは逆方向に。

いやだ。いやだ。いやだ。

俺はこんなもう一人の俺をみていたくない。

そんなに楽しそうな俺は見たくない。

だって、俺がそうしたかったのだから。

お前は俺じゃないと否定したいけど、みせられた幸せを田の前に

俺の口からでる言葉は何もなかつた。

もう、何もみたくない。何も。何も。

こんなに悲しい幸せを見るくらいならもう何も見えない暗闇で。
そうすればもう、何も感じなくてすむのだから。

・・・

何してるんだ?

俺がその子に問いただてるとなその子は泣きながらいつた。

「お前と同じことをしたかった。なのに別の事をしていった」と。
訳がわからぬまま考へていると考へていると光が差して消えた。
俺はその子の顔を見たことがあった。それは俺自身の顔だった。

•
•
•

並べられた言葉だけが本当の意味なのだろうか。聞こえる声だけが本当に心の叫びなのだろうか。見えるものだけが本當にある世界なのだろうか。今こうしている自分が・・・本當の自分なのだろうか。

(後書き)

結果、入れ変わってしまったわけですね。

私としては、自分の中の少し難しい部分、

自分でもよく分からない、理解できない部分に

飲み込まれたといいましょうか、そんな感じを描いたつもりです 笑

ただ、最後は苦しい自分を捨てるために

自ら自分のまだ触れてない、触れることができない明るい部分に飲み込まれたのではないか?

というようなテイストにしてあります w

分かりにくい話でほんとすみません^ ^ ;

また、この物語はファイクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3136h/>

もう一人

2010年12月4日05時27分発行